

2015年8月2日 第一主日聖餐礼拝

説教「少年と巨人」

サムエル記第一 17章 31-49節

【少年と巨人】

少年ダビデは巨人ゴリアテを倒しました。けれども、神さまの計画は、ただゴリアテからイスラエルを救うことだけではありませんでした。この事件をきっかけに、ダビデは人々に知られるようになります。サウルもダビデを召しかかえ、戦士たちの長とします。こうして、ゴリアテとの戦いは、ダビデが王になるための、道を備えることになりました。神さまがそのようにお用いになったのでした。

神さまのご計画は、さらに続きます。「すべての国は、イスラエルに神がおられることを知るであろう」(46)。神さまがかつて、アブラハムと交わされた約束の実現です。神さまとともに生きるヘブル人を見て、世界中の人が神さまを知り、神さまに立ち帰る。これが神さまの大きな願いでした。今も神さまはこのことを願っておられます。そして、すべての国の神になろうとおっしゃってくださっているのです。

【人と共に働かれる神さま】

聖書は「この戦いは【主】の戦い」(47)と記す一方で、「こうしてダビデは、石投げと一つの石で、このペリシテ人に勝った…ペリシテ人を打ち殺してしまった。」(50)とも書きます。神さまは、ほんとうに力あるお方、神さま

に出来ないことなどなにもありません。けれども、神さまが歴史を導いていかれるそのやり方には、特徴があります。それは、ご自分のご計画に私たちを参加させなされる、ということ。もとより、私たちは無力でほとんど何もわかっていません。まちがいなく、神さまの足手まとい。それなのに、神さまは私たちを、お用いになることがお好きです。そうしながら、手取り足取り教え、不足を補い、成長させながら、ご計画をなしとげる。私たちといっしょに、私たちを喜びながらなされるのが、お好きです。そして、私たちに対して、あなたがたは力がないのにもかかわらずよくやった。これはあなたがたの勝利だ、とそう言ってくださるのです。

【怒るダビデ、怒らないサウル】

神さまと働くときに大切なのは、私たちの心が、神さまと同じ方を向いているかどうかです。ゴリアテに立ち向かったダビデは怒りに燃えていました。「おまえがなぶったイスラエルの戦陣の神、万軍の【主】の御名によって」(45)とあります。ダビデは、自分が愛する神さまを侮辱されたので、怒りました。自分のことだったらここまで怒らなかったほどに、怒ったのでした。

ところがもっとも怒るべきだった王であるサウルは、「非常に恐れ」(11)、「あれを殺す者がいれば、王はその者を大いに富ませ」(25)と人をあてにし、ダビデが名乗り出たときも

とどめよう(33)としました。サウルには怒りがなく、神さまに対する愛がないのです。なんというか、神さまの愛に対して無感覚なのです。これはとても悲しいことです。

【ただ愛すればよい】

サウルもかつては無感覚ではありませんでした。11章で、アモン人がヤベシュ・ギルアデの人々をなぶったときサウルは怒りました。無感覚ではなかったのです。この後、どうしてサウルが無感覚になっていったのか、聖書にははっきりとは書いていません。けれども、信仰者には、神さまの思いに無感覚になってしまうときがあります。それは恵みが義務に変わってしまうときです。

13章で、サムエルが刻限に遅れたとき、サウルは散って行こうとする民を引き留めるために、自らいけにえを献げてしまいました。民に対して「たとえサムエルが来るまでに、戦いが始まったとしても、何もおそれることはない。やむをえない事情でいけにえを献げることができなくても、神さまの愛は私たちを離れることはない。」と語ることができなかったのです。

何かの義務を果たさなければ、神さまの愛を受け取ることができない、と思っはなりません。神さまを喜ばせるのは、ただ神さまを愛することです。神さまを愛するとき、私たちの無感覚は、癒されていきます。仕えることが重荷ではなく喜びにかわっていくのです。